

主体的な「読み」の活動を促す授業の構築を目指して

石井 希代子

(1) はじめに

自分の読みとりを文章で表現することによって自分の中にある漠然とした考えを整理させ、他人の意見を聞くことによって読みを深めさせていく。そんなことを意図して、単元が終わると感想を書かせ、それをこちらでまとめて紹介するという手法を今まで使ってきた。自分とは異なる視点で書かれたものを読んで、「他の人はこんなことを考えているのか」と、触発された様子はみられるものの、多様な読みを知ることが本当に生徒の読みを深めることになっ

(2) 二つの実践から

① 「筒井筒（伊勢物語）」の実践（三省堂「高等学校国語Ⅰ」）

一 授業の概要

月 日 二〇〇一年十一月
対 象 広島県立福山誠之館高等学校一年生

一クラス（四〇名）

二 授業の実際

第一時 「伊勢物語」以前以後の物語文学の流れ・「伊勢物語」についての説明。全文の音読と場面分け。

ワークプリント（全クラスで共通して使用する助動詞の確認プリント）で助動詞の確認。

第二時 場面一（幼なじみの二人が結婚するまで）を読んで、二

つの和歌に込められた思いを読みとる。

第三時 二つの和歌をそれぞれ現代短歌で表現する。(資料①)

(第二時で行う予定であったがずれこんでしまった)

場面二(高安の女のもとに通っていた男が通わなくなるまで)を読む。

第四時 場面三(その後の高安の女の様子)を読む。

男が高安の女のもとに通わなくなった理由を考える。

依万智の「恋する伊勢物語」を読んだ後、この話をどのように読むをまとめる。(資料②)

資料① 和歌を現代短歌で表現したもの

【男の歌】筒井つの井筒にかけしまろがたけ

過ぎにけらしな妹見ざるまに

A いつの間にか 井筒を超えた 私の背

あなたは会うと 驚くだろう

B 我が背丈 君を待つ間に 井筒越し

君を迎える 準備ができた

C 僕の背は こんなに高く なりました

あなたに会えない 日々の間に

D 僕だって すっかり大きく なったのさ

いつでも君を 迎えに行ける

E 背も伸びて お年頃に なりました

もうすぐ君を 迎えに行くよ

F この思い ずっと変わらず 待ち続け

早く願いが かなわないかな

【女の返歌】くらべこし振分髪も肩すぎぬ

君ならずして誰かあぐべき

a 幼い日 比べた髪も 肩を過ぎ

あなたのために 結い上げたいわ

b 振り分け髪 肩過ぎるほど 伸びたのよ

あなたのために 髪上げたくて

c うれしいわ あなたが迎えに くるのなら

肩過ぎた髪 髪上げします

d 肩過ぎた 私の髪は 誰のため

早く私を 迎えに来てよ

e 待っている 間がとても 長すぎて

わたしはこんなに 成長しました

f くらべこし 手の大きさも もう変わり

宝石の輪君の 待っているから

この現代版短歌に表現させる作業は「和歌はよくわからん」という苦手意識や和歌を暗記の対象としてみて「訳と技法を覚えときゃいいんじゃない」というような生徒の構えを改善したいと思ひ、組み込んだ。この二首は(歌の詠まれた状況をふまえているので)内容もつかみやすい。読みとった歌に込められた思いを表現し直すこと

で、和歌に対する苦手意識を緩和するきっかけとすること、与えられる解釈を待つて覚えるのではなく、積極的に関わることを促すことをねらった。

実際に行つてみると「なんでそんなめんどくさいことを」と、すべての生徒には好評とはいかず、数名の生徒が提出しなかった。くわえて隣の生徒の書いたものを少し変えて出すだけのものも見られた。もとの歌の素材を使つて変にアレンジをせずそのまま表現したもの、込められた思いを表に出したのも、もとの内容から離れてしまつているものと三パターンあつた。作業の途中で見てみると、男の歌では「迎えに行く」女の歌では「男が」迎えに来る」という内容をよんでいるものが複数目に付いた。そこには「男性が女性を迎えに行き、男性の庇護のもと女性が幸せに暮らす」という結婚についての考え方がはたらいている。

そのことは当時の結婚後の生活について説明したときにでたある生徒の発言によく現れている。その生徒の発言は「光源氏のように女性を囲つて養う場合もあるんじゃないやん」である。が「光源氏と一地方官のこどもを一緒に考えたらいけまあ」が「がんばつて何とかなつたらなら、なんとかしとるはずじゃあ」という発言が後に続いた。初めの生徒の意見からは「男ががんばつて女を幸せにするものだ」という考えがうかがえ、それと合致する自分の古典に於いての知識を例に、男のふがいなさを問題にしたのだと考えられる。そしてそれに続いた発言からは「一つの作品のある事象と単純に結びつけて考えてはいけない」という指摘と「庇護してくれる親

を失つたために生活が苦しくなつた」という状況に対して、仕方のないこととして語られるままに受け止めている様子がうかがえる。初めに発言した生徒は、納得しつつも男に対する否定的な印象はぬぐえなかつたようで、この後に続く、妻の浮気を疑つて隠れて様子をうかがつてゐる場面でも「最低な男だ」という発言をした。

授業の終わりに、単なる美談や教訓としてではない読みのモデルとして依万智の「恋する伊勢物語」から該当部分を紹介し、この物語をどのように読むのかということを書かせた。

資料② 「筒井筒」を読む

(ア) 好きになつた人が浮気しても好きだつたらガマンするしか仕方ないかなあと思うけど、私はもとの女のように笑顔で見送るなんてムリだと思ふ。そういう点でもとの女はすごいなあと思ふ。それが計算からか本心からはわからないけど男の気持ちをもみごと取り返せたんだから。私自身はどちらかと言えば高安の女に近い。いつもいいところばかり見せようとしたら疲れるし、自分のありのままを好きになつてもらいたいから。そういう点では高安の女のかたを持ちたくなるんだけど、この物語では捨てられてしまふんですね。結局もとの女みたいな人が選ばれるんですね。

(イ) 私はもとの女が、浮気に出かける夫を笑顔で見送り、化粧して夫の身を案ずる歌を詠むなんてちよつと理解できなかつた。い

くら生活のためとはいえ、そんなまね私には絶対できない。本
当に好きだったら我慢できないと思う。でも嫉妬むき出しにし
て嫌みとか言ったら男の心は離れていったらどうから、結果
的にもとの女の行動はそれでよかつたんだらうけど、なんか納
得いかなかった。俵万智さんの文章にあつたように、作戦なの
だと考えると少しは納得できるけど、どちらにしても浮気相手
のところへ行く男を送り出さないといけないなんてツラスギル。
「女はつらいよ」って話？

(ウ) しゃもじでご飯すくつたからって通わなくなつたんじゃ高安の
女がかわいそう。「私が面倒みてあげているのよ」ってかんじ
でおたかくとまっているよりよっぽどいいと思う。しゃもじを
使うのがそんなに下品なことだろうか。それでさめてしまうな
んてちつちやい男だと思ふ。妻の浮気を疑つてハリコミするほ
うがよっぽど品がないと思うけど。こんな男現代だつたらだれ
も相手にしないと思う。

(エ) この男は情けない。が、金はあつてもだらしな女よりも自分
を思つてけなげに尽くしてくれる女のほうがよっぽどいい。で
も、自分を思つて何度も歌をよこす高安の女もなんかかわいそ
うだ。

(オ) 僕自身はどちらかといえは、高安の女のほうがいい。最初は初
恋の相手だし、自分のことを思つてるって感じがしてもとの女

がいいなと思つたけど、もし作戦でやつたと思えたらなんか
いやだし、女は怖いと思つた。昔は公然と浮気ができていたと
いうのは女の人にとっては大変だつたと思ふ。

(カ) 男がもとの女のところに戻つて、高安の女のところに通わな
なつたというこの話は、結局男にとつて都合がいい女がいいん
だつて言っているような気がする。浮気に対して文句ばかり
言つていたら男はいやになるだけで、いやな顔を見せず一途に
男の心配をしているような女に男は弱いんだつてことと、気を
許しすぎてだらしなくなつてもダメだつてことを言つてる気が
する。男つて勝手だなあと思つた。

(キ) この話は男に都合がよすぎ！なんで自分の浮気を棚に上げて妻
の浮気を疑うような男がもてるわけ？サイテーな男なのに。も
との女の所に戻つたとかあるけど、生活苦であるという根本の
原因が解決していないんだから、また男は別の女の所に通うか
もしれないわけで、もしその女が高安の女のようにではなくて、
上品で奥ゆかしい人だつたらもとの女はどうするんだらう。

生徒が書いたものを見ると、女子では自分ともとの女、高安
の女を比べて相違を述べ、もとの女の行動を理解できないものとし
て切り捨ててしまつているものや、高安の女を擁護しているものが
多い。男子では男批判に終つてしまつてしまつているものや、自分ならど
うするかといったものが多い。いずれも登場人物に対して、自身の

価値観から同調したり、批判しているのである。そういったなか、男の心理・行動を通して語られる価値観に言及するもの、一見ハッピーエンドに見える終わり方に疑問を抱くものも若干ではあるがみられた。

② 「いっしょ」の実践（明治書院「精選現代文」）

一 授業の概要

月 日 二〇〇一年十一月後半～二〇〇二年一月

対象 広島県立福山誠之館高等学校二年生

三クラス（118名）

二 授業の実際

- ・ 本文通読（一時間）
- ・ 教科書以前の部分の内容についての補足説明（〇・五時間）
- ・ 内容理解（八時間）
- ・ 感想をまとめる（〇・五時間）

教科書に採られている部分は、Kが「話がある」と図書館にいる私のもとを訪れる場面から、私がふすまに飛び散ったKの血潮を眺める場面までである。

通読後に「K」はなぜ自殺したのだと思うか、生徒に尋ねた。ほとんどの生徒が「私（先生）に裏切られたからだ」と答えた。「私（先生）」の自殺については、「罪の意識から」ということをあげ

た。そして「私（先生）」と「K」に対する印象を聞くと「私（先生）」に対しては親友を裏切るなんて最低の人間だという印象を受けたという生徒、気持ちはわからないでもないと同情的な見方をする生徒が大半を占めた。「K」に対しては自分の信念にこだわり過ぎるところや突然自殺してしまうところからよくわからない人物であるという印象が強いようであった。

生徒たちの多くは短い言葉で切り取るように伝えることは得意だが、自分の考えや「読み」をじっくりとある程度の分量をもって表現していくことが苦手である。書けないと訴える生徒に、読みの視点を提示しても数行で終わってしまい、後が続かない。少しでも書くこととする（読みを表現する）抵抗を少なくしようという思いと、「この小説には〜が描かれている」と一言で片づけさせたくない、いろいろな立場に立つて考えさせたいとの思いから、項目をたてて感想文を書かせた。書かせた項目は「K」について、「私（先生）」について、「お嬢さん」について、先生が遺書を私に託したのはなぜか、この小説の続きを考えてみよう、の五つである。このうち、「K」について、「私（先生）」について、「お嬢さん」について書いたものを見てみる。

◎ 「K」について

（ア）自分の志を貫きとおせなかったことで自殺するなんて、とてもまじめすぎると思う。私なら絶対自殺なんかしない。死んだらそこで終わりだけど、生きていれば何か変わってくるかもしれ

ないし、学べることはたくさんあると思う。

対し魅力を感じている生徒もいる。

(イ)お嬢さんを好きになったことが自分の道から外れていて、生き

る望みがないと考えるなんて、寂しい考えだと思う。人を好きになるのはとても素敵なことだし、大切なことだと思うから、そのことを否定してまで生きていくのは生きていく意味がないと思う。

(ウ)信念を持って生きるがゆえに悩んでいるのを見て気の毒だと思

った。一つの道のみで生きていくのもすばらしいことだと思

うが、それはとても辛い道であり、死んでしまえばすべて終わりである。自殺は一番いけないと思う。なぜ思いとどまれな

かったのだろう。

(エ)Kはかつこい。自分の道を信じて突き進む。今にはいない人

だと思ふ。最後死んでしまうのは本当に残念だったが、気の迷

いは誰にでもあるものだから、修正して道を極めて欲しかった。

「恋」が「道」の妨げになるという考え方、「道」に生きようとし

ていた過去を捨て「恋」に生きることを選べない「K」の葛藤、

「道」にはずれたから自殺するという発想が「K」には必然だった

ということが、頭では理解できても納得できず、「どうしてそこまで」と、自分の理屈では説明できない存在として違和感を述べている。

その一方で、理解はできなくとも無視できない存在感を発するKに

◎「私（先生）」について

(オ)自分にとって「私」はとても人間らしい、人間くさい、とても

いうか、なまなましく想像できる存在だった。迷い・浮き沈

み・保身の心は人が忌み嫌うものでありながら、また人を巢喰

うものでもある。彼はそれに翻弄され続けた人生であったので

はないだろうか。信じていた相手に裏切られた過去を持つがゆ

えに、まっすぐに生きたいという思いは人一倍あつたと思うの

だが、結果的に自分を信頼し相談してきたKを追い詰め、自殺

に追いやってしまったのだから。

(カ)思ったらすぐに行動を起こして解決すればいいのに。とはいっ

ても、だれでも言いたくも言えないことはあるから、しかた

ないのかもしれない。その勇気がでなかつたせいで、苦しみな

がらずつと生きることになった。先生はいつも死に場所を求め

ていたのかもしれない。Kと同じように「もっと早く死ぬべき

だったのに」と思いながら、後に一人残されるお嬢さんと思う

と踏み切れずにいたところに「私」が現れた。「人生からまじ

めに教訓を得たい」という「私」に自分の過去の過ちを話すこ

とで自分の人生に決別を告げたのかな。

(キ)最後に自殺するところ以外は、この中で一番人間らしい人だと

思う。タイトルの「こころ」はこの先生のこころのことだと思
う。Kを裏切ったのは悪いが、裏切ったことを謝れないまま
ずっと罪悪感を背負って生きていくのはどんなに大変なことか
と思う。思っていたことがよい方向へ転じない不幸な男だと
思った。「恋は罪悪だ」とか言っていた意味深な言葉の意味がよ
くわかった。

(ク) Kにあきらめさせようとひどいことを言ったり、だしぬいて結
婚を決めたりするのは人として許されることではない。おまけ
に死んだKを目の前にしても自分の心配をしているのだから、
本当に自分のことしか考えていない。ただ、そんなところが自
分にはないかと思うと100%ないとはいえない。私のやった
ことは最低だと思うが、その後の苦悩を思うとなんだかやりき
れない気持ちになった。

(オ) (キ) では「人間らしい」「人間くさい」という言葉を用い
て「私(先生)」を語っているのだが、どこか遠くから眺めている
様な印象を受ける。そういう言葉を用いるとわかったような気にな
ってしまい、それより先に読みが進んでいかない。迷い・浮き沈
み・保身の心を持っていることが人間らしいのか、「人間らしい」
とするその内実を問題としなくてはならない。また、「意味深な言葉
の意味がよくわかった」というように、「くがわかった」と書いて
いるものも、どんなふうにわかったのかについては言語化されない
ままになっている。そして、「やりきれない気持ち」についても、

同様である。

◎「お嬢さん」について

(ケ) 二人の気持ちをうすうす気づいていたんじゃないかと思う。で
も、どちらのことが好きだったんだろう。奥さんが「あの子の
不承知のところにやるはずがない」とか言っていたけど、とい
うことは先生のことの方が好きだったということか。でもどっちで
も良かったとも考えられますよね。うーんどっちなんだろう。
でも、たぶん先生がしたことを知ったらクライになると思う。
どんなに愛されていても、親友を裏切るような人は許せないと
思う。

(コ) 自分の知らない間に結婚を決められてかわいそうだ。自分のこ
とは自分で決めたい。先生のことを好きだったようだからいい
のかもしれないが、結婚後人が変わったようになってしまった
先生とずっと暮らさなくてはならなかった上に、自殺されてし
まうのだからかなりつらいと思う。一番かわいそうなのはお嬢
さんのような気がする。

(サ) 自分の知らない間にこんな多くのことがあって、もし真実を
知ったらとてもショックだと思う。でもお嬢さん自身は何も知ら
ず好きだった人と結婚できたのだから幸せだったんじゃないか
と思う。先生とKの二人の男性から恋い慕われたわけだから

よっぽど魅力的な人だったんだろうな。

(シ)個人的にKのファンだったので、彼女がいなかったらKは死なずに自分の道を突き進めたのではないかと思う。そんなにかわいかったのか？二人の男の人生を狂わせた張本人はこの人だと思ふ。なんにも知らないまま生気の抜けたような先生の変わりように苦勞して被害者のように見えるけど、こんな悲劇をひきおこした原因は彼女にあると思う。

「お嬢さん」に対して同情的に見ているものと否定的に見ているもの、幸せだったと見るものと不幸だったと見るもの、何も知らないとするものと二人の気持ちを知っているとするもの、いろいろである。お嬢さんについては記述が少ないぶん、判断材料も少なく自分の思いが先行しているところがある。

(3) 問題点と改善に向けて

生徒に書かせるのは学習のまとめの作業であるという意識が授業者である私自身に強くあったのだが、こうして生徒の書いたものを見ると、十分に思考が深まっていない段階であることがよくわかる。大切なのはその生徒の読みの内実をいかに掘り下げていくかということであり、その第一段階の読みを授業者のほうで勝手にまとめとして位置づけて、読みが浅いと判断し、書く力がないとか、表面的な読みで主体的な読みが行われていないと嘆いても仕方がないので

ある。では、どのように掘り下げていくのか。

① 生徒の書いたものをみていくと、「高安の女はかわいいそう」「男は最低だ」「先生はかわいいそうなんだ」「先生はひどいやつだ」「お嬢さんが一番の被害者だ」など登場人物に対して様々な判断をしている。そういった判断はもちろん自分の考え方やものの見方によって行われているのだが、生徒自身は自分がなぜそのような判断をしているのか、自分の判断の裏にある考え方やものの見方を認識できているのか。自分とは異なる判断が提示されることによって、自分の判断をとらえ直すきっかけをつかむことは可能だが、生徒の自主性にゆだねるだけでは、十分とはいえない。読むことによって自分の中に生じたものの内実を目を向けさせ、読みを深めさせていくように仕組んでいく必要がある。

②

「筒井筒」においては、浮気相手のもとに通う自分をけなげに思うもとの女のところにもどり、自らしゃもじを握る高安の女のもとに通わなくなったという男の行動・心理から「結局男にとって都合のいい女がいいといっているような気がする」という物語の構造をふまえた読みが出てきているが、「こころ」においては、そういった読みはでない。これは、書かせるときに項目をたてたのが要因であると考えられる。表現されているもの、あるいはされなかったものに目を向けさせ、語られるものの意味を見いださせるよう仕組んでいくことも必要である。

③ 「筒井筒」の実践においては、単なる美談や教訓としての読みを相対化するための一つの読みのモデルとして俵万智の文章を読ませたのだが、生徒にとっては彼女の読みが違和感なく受け入れることのできるものでありすぎたために、逆に生徒の読みに方向性を付けてしまったおそれがある。生徒の読みを深化・拡充させるための「材料」としてどんなものを選び、いかに提示していくのがカギとなる。

「書く」という作業を授業に取り入れる場合、何をどのように書かせるのか、そのためにはどのような工夫が必要なのか、その検討が不十分であったのは言うまでもない。さらに、安易な思いつきによる補助資料の使用によって、生徒の読みを方向付けてしまっており、授業構想の稚拙さが浮き彫りとなった。

さらに、書かせたものを提示する場面においても、読みの広がりを生徒の自主性にゆだねるといふ消極的な手法ではなく、そこに書かれたものを積極的に掘り下げていくことによって、生徒の読みを深化・拡充していくような授業を構築していくことが望まれる。

(4) おわりに

「多様な読みを知ることが本当に生徒の読みを深めることになっていくのだろうか、そこで提示する生徒の読みは本当に多様といえるのだろうか。」という問いから、昨年度の実践を振り返ったのだが、こうして生徒の書いたものを読み返してみると、それは授

業のまとめとして位置付くものではなく、実際には出発点であったことがわかる。なぜそう思うのか、そのように感じるのはどうしてか、そこに書かれたものを掘り下げていくことが読みを深めていくことにつながるのである。「授業のまとめでこんな感想が出てくるなんて、授業をやつてないのと一緒だ」というご指摘も受けたが、まさにその通りである。表面的理解にとどめ、考えるべきところを十分に考えさせることが出来ていなかった。

昨年度の取り組みのあり方を振り返ってみても、生徒にこんなことを考えさせたい、こんな力を付けたい、だからこの教材を扱おう、というところからスタートしているわけではなく、教科書にあるから、シラバス（年間指導計画）で決まっているからその教材を扱うという受身の姿勢であり、扱う教材が先にあって、その教材で何を問題にしていくのかを考えるとというものであった。そのため授業の構想もその教材を中心としたものであり、「教材で教える」ということを意識しながらも、「教材を教える」ということに終始していた。授業構想の甘さ、自分の力量不足を痛感することになったが、いわば書かせっぱなしに終わっていた過去の実践を振り返り、多くの課題が明らかになった。発表の際にいただいたご指導・ご助言をかみしめながら、目の前に山積する自分の課題と向き合い、今後の授業改善に努めていきたい。

（広島大学附属福山中・高等学校）